

自己イメージの表出欲求と身に着ける服の色の関係

Self-image presentation and fashion color

三枝千尋 Chihiro Saegusa 花王株式会社
東京大学
佐藤直紀 Naoki Sato 花王株式会社
渡邊克巳 Katsumi Watanabe 東京大学

Kao Corporation
The University of Tokyo
Kao Corporation
The University of Tokyo

キーワード：自己イメージ、服飾の色、印象管理
Keywords: Self-image, fashion color, impression management

1. はじめに

衣服やアクセサリ、メイクアップ、ヘアスタイル・ヘアカラーといった服飾・装身具は他者に呈示される自己イメージをコントロールする道具の一つであり、私たちはこれらを通じて自己の社会的役割やパーソナリティを伝達していると考えられる。一方、色は感情と深い結びつきを持ち、色から様々な情報を得ている。色と服飾との関連でいえば、他者のパーソナリティ評価がその人物の衣服の色や髪の色によって影響を受けることが知られている。

そこで私たちが日常的に行っている被服行動のうち特に色に関連する選択と、他者に対して呈示したい自己イメージとの関係を知ることを目的とした調査を実施した。この結果、日常的に着用する衣服の色選択行動と呈示したいパーソナリティイメージの間に一定の関連がある可能性が示唆されたので報告する。

2. 方法

東京近郊在住の日本人女性 198 名（20-59 歳、平均年齢 39.7 歳）を対象とし、平成 24 年 11 月 18 日～12 月 12 日に、会場での面接および調査票記入からなる調査を実施した。ファッションによって見せたい自己のパーソナリティと実際に日常生活において着用する服の色を、自記入調査票により聞き取りを行った。なお、本部分に関して回答に不備があった 1 名を除いた 197 名について解析をおこなった。

ファッションによって見せたい自己のパーソナリティは、16 項目の形容詞対に対し、「ヘアカラーやメイクアップ、服飾などのおしゃれをする

ことで自分をどのように見せたいと思うか」を「非常にあてはまる」から「全くあてはまらない」までの 7 段階で回答させた。

日常的に着用する服の色は、高演色昼白色蛍光灯（東芝ライテック FLR40S/N-EDL/M-NU）で照明された会場において色見本を呈示し、その中から普段着用する服の色として当てはまるものを選択させることで聴取した。色見本には日本色彩研究所の発行する新配色カードから 7 トーン（pale, light grayish, light, dull, dark, deep, vivid）7 色相（PCCS 色相 2:red, 4:reddish orange, 8:yellow, 10:yellow green, 12:green, 18:blue, 22:purple）及び、黒、白、グレイ（Gy-3.5, Gy-5.5, Gy-7.5）を加えた 54 枚を系統的に選択し、3cm × 4cm の大きさに切りとったものを白色の台紙に貼り付けて呈示した。

3. 結果と考察

3-1. ファッションによって見せたい自己のパーソナリティ

Table 1 表出したい自己のパーソナリティ

因子名	尺度	第一因子	第二因子	第三因子
社会的望ましさ	道徳的	.802	-.030	.042
	分別のある	.794	-.042	.011
	賢い	.785	-.023	.059
	信頼できる	.736	.190	-.130
	きちんとした	.728	.052	-.063
	落ち着いた	.702	-.070	-.041
	有能な	.662	.037	.119
対人好ましさ	好かれる	.096	.873	-.175
	親しみやすい	.020	.724	.011
	魅力的	.025	.719	-.067
	社交的	-.002	.660	.243
	外向的	-.059	.565	.366
	神経質な	.196	-.372	.289
自分らしさ	個性的な	.042	-.204	.788
	積極的な	.036	.133	.754
	自由な	-.129	.141	.579

服飾によって見せたい自己のパーソナリティに対する回答結果を「非常にあてはまる」を7、「全くあてはまらない」を1としてスコア化し、反復主因子法、プロマックス回転による因子分析を行い、3因子を抽出した (Table 1)。第一因子は道徳性や分別、賢さ、きちんとしていることなど社会の一員として求められる尺度が含まれていることから「社会的望ましさ」が、第二因子は親しみやすさや社交性、好かれるといった対人関係上好ましいと考えられる尺度が含まれることから「対人好ましさ」が、第三因子は個性、積極性、自由といった自分らしさの表現に関わる尺度が含まれることから「自分らしさ」を反映すると考えられた。

3-2. 着用する衣服の色

普段着る服の色として選択された色数は平均 9.6 色であり、年齢による違いは見られなかった。全 54 色の色票の選択率を、色相及びトーンごとに分けて集計した。その結果、色相としては無彩色が最も多く選択され (197 名中 191 名選択)、ついで red (143 名), blue (134 名), reddish orange (128 名) の順に多く選択された。反対に選択者が最も少なかったのは、yellow 及び yellow green (両者とも 63 名) であり、次いで green (87 名) であった。トーンとしては、最も多く選択されたのが dark (147 名) であり、ついで deep (130 名) が多く選択された。反対に選択者が少なかったのは、light grayish (73 名), dull (78 名), pale (81 名) であった。三浦らによる先行研究においては女性が身につけたい色として black, white と並んで pale トーンが挙がるという結果が報告されている。今回 dark トーンおよび deep トーンが多く選択された理由として、調査が秋に行われたこと、日常的に身につける色をいくつでも選択可能であったためにより普段使いの色が多く選択される傾向にあったことが考えられる。

3-3. 表出したい自己のパーソナリティと着用する服の色の関係

個々の被験者の着用色選択パターンを知るため、身につける色として選択されたものを 1 点、選択されなかったものを 0 点とし、各色に対するクラスター分析 (Ward 法、平方ユークリッド距離) を実施した。その結果、色票は「淡い色」、「はっきりとした色・濃い色」、「基本色」、「無彩色」の 4 つに分類された (Table 2)。各被験者の着用色ク

ラスター得点をクラスター構成色の中から選択した色の数として算出した。また全色票の中での選択色数を、被験者が日常的に着用する衣服の色のバリエーションの多さの指標とした。

Table 2 着用する衣服の色クラスターと構成色

衣服色クラスター 及び構成色数	構成色票 (PCCS表記による)
淡い色 (30色)	p2, p4, p8, p10, p12, p18, p22 ltg2, ltg4, ltg8, ltg10, ltg12, ltg18, ltg22 lt2, lt4, lt10, lt12, lt18, lt22 d2, d4, d8, d10, d12, d18, d22 dk8, dp10, v10
はっきりとした色・ 濃い色 (14色)	lt8 dk10, dk12 dp4, dp8, dp12, dp18, dp22 v2, v4, v8, v12, v18, v22
基本色 (5色)	dk2, dk4, dk18, dk22 dp2
無彩色 (5色)	W, Gy-3.5, Gy-5.5, Gy-7.5, Bk

ファッションによって見せたい自己 3 因子の因子得点と、着用する服の色の各クラスター得点との相関を調べた結果、「対人好ましさ」と「淡い色」($r = .145$, $p < .05$)、「対人好ましさ」と「基本色」($r = .168$, $p < .05$)、「自分らしさ」と「はっきりとした色・濃い色」($r = .157$, $p < .05$)の間に有意な正の相関が見られた。また、「対人好ましさ」は身につける服の色の総数とも有意な正の相関が見られた ($r = .192$, $p < .01$)。いずれも相関は弱いものの、表出したい自己のパーソナリティイメージの種類によって日常的に選択している衣服の色や、衣服の色の種類の多さに違いがあることが示唆された。

4. 結論

日本人女性がファッションによって表出したい自己のパーソナリティ特性として、社会的望ましさ、対人好ましさ、自分らしさの三因子が抽出された。またこれらの因子得点と被験者が普段着用する服の色の間の相関から、日常的な衣服の色選択と表出したい自己のパーソナリティイメージとの間に関係があることが示唆された。

参考文献

- 1) 三浦久美子ら：＜身につける色＞と＜周辺の色＞の嗜好比較, 日本色彩学会誌. VOL28 (2004) 163 - 175.